

遺憾ながらこの世界はよく滅ぶ

七津八

※作者急病のため、本作は非常にへついていきづらい内容を含みます。

* 一時限目 *

我輩はアブソリュート学園。校舎である。

建坪約二千平方メートル、三階建て、鉄筋コンクリート。ごく一般的な直線の内廊下で結ぶ長屋造りを廃して円筒構造を採用。上から見れば扇形の教室がドーナツ状の内廊下を挟んでロータリーに敷き詰められたかのように見える。教室は全室階段教室で、どの席からでも講義が受けやすく、また内と外に廊下を張り巡らすことによつて非常時の避難経路も確保。閉塞感も和らげる仕様である。内装はシックでフォーマルな雰囲気で統一感を持たせ、生徒たちに知性ある教養への関心を興起させる。我がことながらほれぼれとしてしまう機能的構造美と、細部への美意識とが備わっている。

北側には教室の代わりに大型図書館を設立し、西とそのやや南側には屋内プールと体育館を併設。敷地はなおも有り余り、東と南に張り出した校庭にはヘリコプターが三台同時に離着陸できる。標高は高めで日当たりも良好である。津波も届かない。無論、耐震免震にも手抜かりはないため、災害時には地域の避難所としても役に立つ。惜しむらくは住宅地やオフィス街から少し離れていることのみである。周囲には田んぼが多く、夏季は羽虫が飛び交う。

かくも先進的なデザインを有しながら、しかし我が校は片田舎のごく一般的な普通科高等学校だ。生徒数は百三十名前後と、同地域内では多い方だが教室は余ってしまった。今あるのは二年と三年がF、C、Φ、Ω、一年がCとΩの二クラスのみ。過疎に加え少子化のあおりも受けて将来的な経営が危ぶまれている。しかし、今年の一年次の生徒数が極端に少ないことについては他にも理由がある。その女子生徒は今、三階外側の廊下にいた。ちようど午前の学課が終わり、昼食のために教室から出てきたところのようだ。背が高いというよりもひよろりと細長く、あまり健康的な容姿ではない。しかし頭髮ばかりは日の光を受けてつやつやと輝くほどに美しく、しかも物干し竿のよう

な少女のふくらはぎをまっすぐに目がけて、背丈と同じ長さまで伸びていた。

少女の名はこーしゃという。校舎である我輩と奇跡的なマッチングを果たしているが、その件で囃し立てられたことは一度としてない。かつてつけられた仇名は《シャイ子》。見るからに頼りなげで、事実引っ込み思案な彼女をそう呼ぶ者も、しかしもはやいない。

授業終了からすでに十五分が経過していた。教室には誰も残っていない。こーしゃはいつも一人ぼっちで残される。そういう決まりだ。食堂へ赴くならさらに十五分、計たつぷり三十分居残りしなくてはならない。この約束を破った後には担任からの厳しいお仕置きが待っている。

十五分で教室から出てきたこーしゃは、無論食堂へ行くつもりはなかった。しかしパンや弁当を売る売店へ行くつもりもない。今日こそはと決心していた。こーしゃはふらりとした足取りで隣の教室へ向かう。

(はかせくん……)

隣のΩ組をそろそろと覗いて、まずこーしゃは意中の人の姿を探した。

こーしゃは彼の本名を知らない。その少年は皆から《ド

クター》の愛称で呼ばれていた。

同じように呼び捨てでは性に合わないが、しかし《ドクターくん》では据わりが悪い。おそらくそう思ったからだろが、こーしゃは概ね無意識のうちに彼を《はかせくん》と名付けていた。自分だけがつけた彼の仇名だ。ただし、その名で彼を呼んだことは一度としてなかった。

(……いない)

はかせくんことドクター少年もまた教室の外へ出ているようだった。いや、研究熱心な彼のことだ。そもそも授業をさぼって部室に閉じこもっていても不思議ではない。と、こーしゃは信じて疑わなかった。事実今日のところはその通りだったが、しかし我輩は少年が自分の研究道具を教室に持ち込んでいることも知っている。こーしゃはツイていなかった。

しかし、こーしゃの今日の目的は意中の少年ではない。気を取り直して教室内を見回し、談笑しているいくつかのグループを順に見比べる。どれも今のこーしゃからは眩しすぎる集団に思えた。プラスチックの箸、パステルカラーの弁当箱、総菜パンの袋、淡い色のハンカチと紅茶のパック。一つ一つには縁があっても、それらが楽しげに舞い踊

り、騒がしく唄う光景はいつもこーしゃから遠くにあった。こーしゃはゴクリと唾を飲み込む。

ひととき眩しい集団に目が吸い寄せられる。

男子が二人と女子が三人。とてもなごやかな雰囲気だ談笑しており、皆人がよさそうだ。

この時点におけるこーしゃの人を見る目を我輩は評価したい。五人の生徒は皆幼馴染で、互いにぶつかり合い、助け合って今日まで育ってきた。それぞれがいつも他人に思いやりを持ち、仲間の外にもそれを向けられる。目の前に困っている人がいれば、放つてはおけない。

少女たちは間違いない気立てがよくて親切だった。少年二人も明るく屈託がなかった。こーしゃが声をかけさえすれば、皆一様にあたたく応じてくれたことだろう。

こーしゃは意を決し、ふらりと彼らの輪に歩み寄った。枯葉のように静かに歩く侵入者に、教室内の誰も気を留めることはなかった。五人の少年少女たちも会話に夢中でこーしゃの存在に気がつかない。あと二メートルといった距離まで迫って、こーしゃはいったん足を止めた。

心境的にもこーしゃはもう引き返せなかった。隣の教室に踏み込むことすら内気なこーしゃにとっては大冒険だっ

たのだ。ここで引き返せばその不審な動きを教室内の多くの人間に気づかれるだろう。当然、何をしに来たのか、と勘ぐられることになる。それはこーしゃが想像するだに死にたくなるような羞恥だった。しかし残り二メートルにして、こーしゃの中からは言葉が消え失せていた。頭の中がよんだ熱い何かで塗りつぶされていくのだ。病人のように青白かった肌が紫色に上気し始めていた。耳には自分の心臓の音だけが聞こえている。少女たちの会話も聞き取れる位置にいるのに、一つたりとも言葉として認識できない。

からからに渴いた喉で何か言おうとした。こーしゃには自分の行動がまるで他人のもののように思えた。詰まった息が胸の奥で膨張していくような感覚に囚われる。やがて、誰かに見られた瞬間この情けない懊悩を容易く悟られるのではないかという恐怖が芽を出し始めた。懊悩は惨めで醜いものだという先入観がこーしゃにはのしかかっている。こーしゃはおかげで前にすら進めなくなった。頭の中はしきりに白熱していく。もう何がなんだかわからなくなる。

不意に、五人の輪の中の少女の一人がこーしゃを見た。間違いなくこーしゃの気配を察知し、反射的に振り向いたのだろう。

だがこーしゃにとつてはまるで不意のことで、しかも最も恐れていたことだった。

目が合った瞬間、胸に詰まっていた懊悩は一気に膨らんだ。同時に口を塞いでいたものが取れた。代わりにこーしゃは思いきり目をつむった。

途端、こーしゃの髪が舞いあがる。

こーしゃが身を翻したのではなかった。長い長いこーしゃの髪が、毛先を吹きあげられたかのように躍ったのだ。

扇状に広がった髪はすかさず伸びた。

シャワーのように伸び拡がったかと思えば幾すじかの太い束となり、何かの生きもののように天井近くまで伸びあがった。銘々の太さを合わせると、髪の本数自体が倍に増えたようにも見える。使い古した筆のように先端が割れており、さながら口を開けた大蛇のように鎌首をもたげて真下を見おろしていた。間髪入れることなく急降下し、その髪のは最前の女子を頭から丸のみにした。

こーしゃの髪はなおも止まらぬ。うごめく。毛先が生物の消化器のように蠕動した。毛の束の隙間から悲鳴のようなものが聞こえた気がしたが次の瞬間にはすさまじく醜悪な音にかき消されていた。ナッツを殻ごと口の中で砕いた

ような音だ。毛の隙間から赤黒い液体が噴出する。べちゃりとへばりつくような音を立てて昼食と談笑の跡を汚す。

こーしゃの髪はなおも激しく蠕動し、ぼりん、ぎゅぎゅ、ごりん、と常に音を立てて中のもを咀嚼していた。

ややあって、その隙間から白いものが落ちる。机に当たって男子生徒の足元まで飛んでいったそれは、半分引きちぎれたゴム底の上履きだった。布の部分は血で汚れきっていたが、踵にはフェルトペンの滲んだ字で『ゆゆこ』と。

誰かが悲鳴をあげかけた。だが、大蛇が獲物を飲み込むひとときわ生々しい音がそれを封じてしまった。上を向いた蛇はおくびをするようにまた口を開き、そのままばさっと散って、ただの髪の毛に戻った。髪は血に塗れていたがそれだけだった。少女の遺留の品はそれだけだった。濡れた髪は床をじりじりと滑って持ち主のもとへ帰っていく。皆の目がこーしゃに向いたのはようやくそのときだ。

しかし、こーしゃはそれで動じなかった。人の視線というこの世で一番苦手なものを一身に浴びていても、今のこーしゃには拘泥している余裕さえ皆無であった。彼女は立ったまま震えていた。青ざめているわけではなかった。むしろ自身の指をねぶるようにくわえ、頬を桜色に上気させ

どこかウキウキとしたそれは、もしコーシヤがシャイ子でなければ「もー、困った家畜さんだなあ♥ ワルい子は引きちぎっちゃうぞ☆ ふんぷんっ」とでも言い始めそうな雰囲気だった。色香すら漂っていただろう。ただしコーシヤはお茶目ガールではなかったで、はりつけにされた少年の頬にそっと手を当てて、なだめるように言うのだった。「心配しないで。あなたもちゃんと美味しく食べてあげるから」

コーシヤは少年が悲鳴をあげるよりも早く、彼の首や胴体を含めた計三十八か所を一斉に一瞬で切断し、四十個の肉片一つ一つを小さい髪あざとの鬣たちで残らず咀嚼していった。生き残った生徒たちはさすがにもはや出入り口に殺到するしかなかった。茫然自失としてたずんでいる者は一人もいなかった。しかし貪食姫もまだ満足していない。蹴けつまずいて転んだ女子生徒を一人適当に食らってみたがやはり足りなかった。咀嚼している間にさらに人が減ったので慌てて品定めを始めたが、いきなり北側出口付近の人混みがるごと吹き飛び、ことごとく肉片と化して教室内に降り注ぐ事態となった。

「こおーううしやああああ……!!」

廊下から貪食姫の名を唸るように呼ぶ声がする。

白い壁材が粉塵となって立ちこめているのは、出入り口を挟んで両側の壁へ一直線に太い断裂が現れたためだ。まるで斧をやわらかい土に叩き込んだかのような断裂だったが、スケールと壁の固さにおいて比較にならない。どんな重機を持ち出してもあれほどなめらかな爪痕を我輩に刻み込むことは不可能だ。

その不可能を可能にした少女が、粉塵の中から現れ勇ましく床を踏み鳴らす。血で染めたような赤髪と、筋肉質の肢体特徴的な少女だった。片眉と口の端をめいっばい持ちあげて残忍かつ挑発的に笑う。その顔の横には彼女の身の丈より長い槍そうごが突いた。柄より刃の長大な槍だ。柄の先から扇状に張り出した刃は、下方に向かってなめらかに伸びて、柄そのものを覆わんばかりとなっている。肩に担いだその槍で、少女は教室の壁をぶち破ったのだ。

この勇ましい少女の名は封理亜鉛ふうりあえん。一年Ω組のクラスメイトである。そして彼女を知る者からは時に《戦神フリアイエ》の名で示される。

戦女神は愛斧を易々持ちあげると、突き出すようにして水平に構え、切っ先をコーシヤに向けた。戦意はもはや爪

先からも立ちのぼり、その瞳は期待でらんらんとした輝きに満ちていた。

「やあっと、やあっとヤル気になったなあ、こーしゃ？ 真性無意識ドSの貪食姫、博愛主義の肉食主義者！」

煽るように口上を述べて、戦神フリーアエは切っ先をさらに前へ出す。

しかし貪食姫はそこら中に散らばった生徒の死骸を髪で拾い集めるのに夢中だった。

「もったいない、もったいない」

「おいしい！ そののくいしんぼお！ こっち向けコラアツ、オラアツ！ でぶ！ でえええぶ！」

《でぶ》はこーしゃに最も効果的な罵倒だ。

一瞬動きを止めたこーしゃは、ぐずするような顔つきでフリーアエを睨み返した。

「……でぶじゃないもん」

「うっせ！ こっちも『腹が減って』んだよ！ 家畜が餌くれつつつてんだ。てめえのぜい肉よこせっ、でぶ！」

「生意気」

こーしゃが屍肉を集めるために教室中に伸ばしていた髪が各々太くなるかのごとく増えた。最初に女子生徒を喰ら

ったときと同等の髪の大蛇が五体現れる。目のない大蛇たちの鼻先はなべてフリーアエに向く。

「あなたは家畜のくせに躰がなっていない。嫌いよ」

「オレあてめえのこと大好きだぜえ、ご主人様よお！」
べろりと舌を見せて戦神は喘ぐように吠えた。

その背後で残っていた壁がごとごとく崩れる。

壁を突き破って現れたのは三角錐型の異形の化け物だった。濃緑色の甲殻に覆われた巨体を蝦蛄しゃこのような無数の足

が支え、鋭角の天頂は歩きたびに天井を削っている。前面の底辺にはクワガタ状の顎を構え、また中央には人の頭より巨大な眼球が半分だけ埋まるようにしてほぼむき出しになっている。

このような甲殻の化け物が三体、フリーアエの背後に居並んだ。真ん中の化け物の顎の付け根に少年が腰かけている。

にこにこ人好きのしそうな顔をした男子生徒だ。金色の目が意味深に光る。

「やあやあ、ボクを置いて始めないでもらえるかな」

闖入ちんにゅうするや否や、少年はさわやかにそう言うてのけた。

「人食いの化け物を殺すのは主人公の役割だからね」

このヒーロー志望の少年は自ら《トパーズ》と名乗って

いる。彼が乗っている化け物の名は《オルキエラ》。彼によつて異世界より無限に召還され、使役される武装生物である。少年は彼らを呼び出して無関係の人々を窮地に陥れては、自作自演のヒーローごっこに興じている。

「ヒーローは端役のピンチに駆けつけるもんだろ？ オレがやられるまで待つてな、ペリドット」

フリーアエは貪食姫との相対に水を差された不満を隠さなかつた。《ペリドット》というのは宝石としてのトパーズの古名をかつて奪っていた宝石の名である。ゆえに《篡奪者》でかつ《偽物》という意味でフリーアエは少年のことをしばしばそう呼ぶが、少年はそういう皮肉を常に歓迎するタイプの男だつた。

「キミに任せると役が残らなさそうだ。人喰いを喰い殺して、役を喰い尽くしたら、もうオルキエラたちを暇つぶしに貸してあげないよ？」

「うっぜ！ 言い回しもうっぜ！ そんなときは、殺る気でめえに牙を向けてやらあ。暇に付き合わねえとそのまま喰い殺す」

「貪食姫のお株を奪つてはいけないよ。キミは僕の相棒役さ。ヒーローには相棒がつきものだからね」

左端のオルキエラが電車のブレーキ音のような奇声をあげた。瞬間、フリーアエが飛びあがり、トパーズの頭上に迫っていた髪の毛を縦に切り裂いた。長大な槍斧をさらに右に左にと振り回し、コーしゃが追撃できないように髪を切り散らす。

「これも相棒の役目か？」

「当然」

フリーアエの着地に合わせてトパーズは心底満足そうに微笑んだ。その目前に、むしり取られたオルキエラの残骸がうち捨てられる。

先ほど悲鳴をあげたオルキエラは巨躯の右半分を失つて石炭のような体内組織をむき出しにしていた。

「トパーズのおもちやが美味しくなくて嫌い」

コーしゃがはつきりとした声で言い放つ。

フリーアエはくくと笑つてヒーローを見返した。

「だとさ」

「やれやれ。センスがないね」

トパーズは肩をすくめながら指を鳴らす。すると教室の至る所に黒い霧が渦巻き、渦の中から新たな三角錐型の異形が二体、三体と出現した。

「オレもこいつらはマズイと思う」

「ヒーローは孤独なものさ」

「相棒はメチャウマで人気者だな。ご主人様もよだれ垂らしてオレだけ見てるぜえ？ マジでお呼びじゃねえかもなあ、ペリドット」

「なら、相棒はやめてライバルにしよう。さあ、競争だ」「いいぜえ。いいねえ。パン食い競争は得意だ——ぜッ！」

気合いを声に乗せて放ち、同時にフリアエの体は弾丸の速度で飛び立った。

こーしやは髪かみの罅あきを前面に構えてそれを迎え撃つ。

槍斧の切っ先がこーしやの罅を突き刺さんとした、まさにその直前、フリアエは背後から追いつがってきた炎のあまりが自分の隣に並ぶのを確かに目視した。白く見えるほど激しく燃えあがるその火球は甲高い風切り音をともないながらフリアエを追い越し、槍斧の切っ先と髪かみの罅あきの間へ挟まるように収まった途端、耳をつんざくような轟音と猛烈な光のほとばしりを四方に解き放った。

光の奔流はさらに七色の火の粉となつて教室に降り注ぐ。

爆風によって槍斧の突進は止まり、こーしやとフリアエ

はそれぞれ教室の端まで追いやられた。

火の粉に触れたオルキエラたちと髪かみの罅あきは、刷毛でなぞられた砂絵のように、触れられた部分から焼け落ちるでもなく無造作に消失していく。

やがて炎がその残滓も残さず消えた後、やや凹状にえぐれた教室の真ん中に一人の少女が歩み出てきた。肩口で切りそろえた銀色の髪の下から、真鍮色の精悍な左目が覗いている。右目は髪ではなく、頭に巻いた黒布の下に隠されている。

少女は我が校の制服を着ていない。代わりに肩の出た黒いシャツと腰までスリットの入った長いスカートをはいていた。肌にはびったりと吸いつくようなシャツは、小柄なわりに張りよく盛りあがった胸部の輪郭を強調している。

しなやかな両腕の先には尖鋭なデザインの大砲がそれぞれ提げられていた。まるで小型の固定砲台か戦車に載せる砲筒のようだったが、少女はそれらを床につけずに携えている。彼女の両手が握る短いグリップと引き金の存在が、かろうじて火砲が小銃の類であることを証拠づけていた。

今、その右手の火砲の先端からは、白い煙が流れ出ている。

る。こうして見ると、花火を打ち上げた後の筒のようでもある。実際、彼女が起こした先ほどのナパームかグレネードのような爆発は、何よりも花火に酷似していた。

「はいはい、たーまやー。えー、五時間目だけどお？ あー、みんな死んでるわよねー。はあ……」

ひとしきり視線をめぐらした銀髪少女の意気消沈とした声が、もはや廃屋同然と化した一年Ω組の教室にこだまする。その後の静寂は、瓦礫を殴り飛ばして這い出てきた戦神フリーアエによって打ち払われた。

「てんめえ、このクソロリクソババア！ なんてモノ撃ち込んでくれてんだ!? 百遍ぶつた切つてからゴミに出すぞ、コラア！」

「あー、はいはい、じゃああなたゴミ出し当番ね、二か月くらい。そっちの担任に言っとく」

「げっ」

「あなた一人で馬鹿みたいに殺しすぎよ、戦闘馬鹿。今年の一年で馬鹿みたいに戦意残してんのあなただけよ？」

「だあーっ、馬鹿馬鹿言うな！ だったらてめえが殺る気にかかってくりやいだろうが、シログネえ！」

瓦礫から引き抜いた槍斧の先を少女に向ける。わなわな

と殺気立つフリーアエに対し、シログネと呼ばれた少女はわざとらしく脱力し切った姿勢を取り、顔をあさってへ向けて大仰に鼻を鳴らした。

「冗談。教師が生徒に手をあげていいわけないじゃない。冗談は得物のデカさだけにしてくれる？」

シログネは教師である。それも一年Ω組の担任である。

もちろん我輩はそのことを知っていた。にもかかわらずあえて彼女について《少女》と言い表し、素性の暴露を見送っていたのはその容姿がいかにあどけない少女のものであったからに他ならず、彼女の実年齢を口にする物理的に廃校へ追い込まれる恐れがあるからなどでは決してなかった。断じてそうではなかった。と強調して言及しておかなければならぬ。くわばらくわばら。

「お前に言われたくねえ！ イッチバンツ、お前にだけは言われたくねえ！」

「まあー馬鹿はしょうがないとして——」

槍斧をぶんぶんと振り回して喚くフリーアエを無視してシログネ女史は反対側の瓦礫に近づく。その足元へ物陰から黒い髪の毛が忍び寄っていたのだが、左手の火砲の先が何の予兆もなくそちらを向いて火を噴いた。比較的小規模の

破裂音と共に緑色の火の粉の花が咲き、髪束はみるみる消失する。

まだ爆発の余韻が残っているうちに、シロガネは瓦礫の山の一角を蹴りあげた。岩屋の蓋が吹き飛び、中で膝と頭を抱えていた少女の全身がむき出しになる。シロガネがすぐそばへ踏み込むように足をおろすと、食食の姫は弱々しい声を漏らしてさらに小さくなった。

「こーしやちゅわーん？ 約束破ったらお仕置きだーってセンセエ言いまちたよねー？」

「や……約束は、破ってません……」

こういうときのこーしやにしては珍しく反論があった。担任であるシロガネにとってもこの反応は予想外だったらしく「おや？」という顔をした。しかしすぐさま目を細め、口角をあげてわざとらしく感心した表情で言った。

「はーん？ 隣の教室なら襲っても怒られないと思つたですってー？ 教室で十五分待つたしいー、食堂には行つてないしいー？ おーなかーもすうーいてえーたしいー？」

「か、神様は、食べるために家畜を世に……」

「わたし学年主任なんだけど？」

いきなり低くした声で告げられてこーしやは完全に凍り

ついた。やがてガクガクと痙攣けいれんのように震え始める。元々青白い頬が今や漆喰しつくいのように色を失くしており、もはや完膚なきまでに心を折られているのは明々白白であつた。が、シロガネ女史は容赦なくこーしやの頭を踏みつけにして、その肩へ火砲の先をあてがう。

「退学処分。はい、決定けつてい。やっぱあんた、うちじゃ背負い切れないわ。ていうか、うちでも背負い切れなかつたわね。大事な生徒はあんた一人じゃないの。本能でバクバク食べずにはいられないんだつたら、わたしはあんたを消すしかない。——それじゃー、今日の授業はここまで。きりーつ。れーい。はーい、みなさん、さようならー。きーんこーんかーんこーん……」

シロガネ女史は口でしか冗談を言わないタイプである。引き金はまさに引かれんとした。シロガネの撃ち出す花火は有機的な物質を無差別に抹消する。つまりこーしやは物理的にこの世から退学させられんとした。今一度の満腹も味わうことなく、ドクター少年への思慕の情を誰に伝えることもなくいなくなるところだつた。その瞬間こーしやは何も考えていなかった。しかし、屍肉の味も思い出せない中、少年の顔だけは自然と鮮明にまぶたの裏へ映し出さ

れた。

(はかせくん……！)

こーしやは心の中で少年を呼んだ。自分だけの呼び名で少年を呼んだ。それが間に合ったのはこーしやが消失しなかったからに他ならない。こーしやは消失しなかった。シロガネは引き金を引かなかった。土壇場で情にほだされたからではない。退学式を行っている場合ではなくなっただけのこと。

見よ！ 外廊下のさらに外からまばゆい光が差し込んでくる。黄金の光を放つ巨大な何かが我輩のすぐ近く、屋上の高さに浮かんでいたのだ。

その形状は車輪か古代の糸車のように。車軸の上に面がある。精巧に男の顔をかたどった黄金の面だ。その裏から車輪を囲むように十本の腕が生えている。それぞれに金の腕輪や指輪をまとい、また銘々が隆々とした筋肉に覆われている。その爪には呪詛のしるしのような異国の文字が並ぶ。この世界のどこにもない異国の文字が。

おもむろに面の唇が開いていずれも金色の歯と舌が口腔に覗いた。そのどこへ繋がっているのか不思議な喉の奥からだしぬけに《声》が放たれる。それは実に暴力的な空気が

の振動以外の何ものでもなかったが、その凄まじさたるや我輩の屋上を消し飛ばして二階と三階を半壊に追い込んだ。かろうじて踏みとどまっていたシロガネは破けた天井から金の車輪を振り仰ぎ、眉根を寄せて「異界の神……！」と忌々しげに吐き捨てた。

まさしくそう、この十腕じゅうわんめん面付きの車輪は異世界の乱神。

この学校の二年生で理科部に所属する少年・ヒカルを求め、こことは異なる世界から渡り来た強大な精霊である。

ヒカル少年はごく普通の少年である。物静かで人当たりもよく、どちらかといえば病などには弱い方だ。

だが、この世界以外の世界に行きさえすれば、彼は必ず救世主となる。異世界を滅亡の運命から救い出し、再生の奇跡を呼び起こすという、非凡極まりない才能に恵まれてしまっているのだ。

そして、滅亡しかけの異世界から救済を求めてヒカルの周りに出現する異形は後を絶たない。言うまでもなく彼の才能のせいだ。無論、友好的にヒカルに助力を願う者もいるが、なぜか力づくで、問答無用で連れ去ろうとする大使がやたらと多い。時には、同じ異世界の二大勢力がヒカルを取り合ってこの世界で大暴れすることもあるし、時には、

異世界へ還る魔術か何かを發動させるためにこちらの世界を破滅に追い込もうとする輩まで現れる。それぞれに差し迫った事情があり、各々にとつてそれなりに合理的な手段として行われることばかりだとは思われるのだが、いかんせんこちらの世界に甚大な被害をこうむることは迷惑以外の何ものでもなかった。

そして、今我が校の上空に鎮座している異界の大精霊もまた、迷惑千万な方の客人らしかった。この招かれざる者を嬉々として迎えるのは戦鬪狂のフリアエとヒーロー志望のトパーズぐらいなものだったが、ちょうど二人はそろって瓦礫の下に埋まってしまっている。肝心のヒカルを差し出せば素直に帰ってもらえるかもしれないが、実はヒカルも瓦礫の下に埋まってしまっていて、しかも実は半死半生だったりする。今すぐあの異界の神に対応できるほど有能な人材など我が校にあったらどうか。いずれにせよ、先ほど面が放った衝撃波によって我が校の生徒数は七十を切った。教員の生き残りに至ってはわずか三割である。車輪の化け物を撃退しようがどうしようがもはや我が校の一時閉校——からの廃校——は免れない。再建に尽力せよといえどどこに財源があるというのか。国は毎年予算を削るばかり

りでいざというとき何もしてくれはしないのだ。

シロガネにもなんとなくその予感があったらしい。くなる上は逃走か、退職か、転職先どうしようかなー、自衛隊とか入るうー？とすでに算段を始めているところだった。

そのとき、姿勢を低くして内廊下を駆けていく二つの人影が目に入った。大きな黒いフードと小さな白いフード。

見覚えのある後ろ姿にシロガネはこれ幸いと走り寄る。白い方を捕まえるや否やフードを引っ張った。

「りのいたん、サブライイ！」

「ふひゃっ!？」

フードを外された白い頭が可愛らしい悲鳴をあげる。飴細工のように華奢な両手が生糸色の髪の上でべたべたと跳ね回る。先行していた黒いフードが振り返り、相手の様子とシロガネを見て目を丸くしていた。黒いフードの方は男子生徒、白い方が女子生徒だった。

「ぐ……シロガネ先生」

「うええ、ろえくん、助けてええ……」

「はい、りのいたん、センセエといひことしましよーねー？」

たじろぐ少年の目の前で、シロガネは《りのい》と呼ん

だ女子生徒に無理やり自分の方を向かせるや否や、その小さな唇に自分の唇を重ねた。

「——!!」

「つな、なあああ!!? り、りのい——!!」

「ふはあつ。かあー、うめえ! もう一杯」

「ひや、ひやめへわぶつ、——!!」

~~~~~!!

いかに鉄筋コンクリートの我輩といえど、この惨劇には言葉を失った。詳細を語るにはあまりに忍びない。りのいが真っ赤に膨らんでいく前で、少年の方はみるみるやせ細っていくかのように見えた。ついでにシロガネ女史は、なんだかとても生き生きとしている。

しばらくシロガネに口を吸われ続けて、ジタバタと抵抗していたりのいも次第にぐったりとし始めた。そこでようやくシロガネから解放され、骨まで吸われ尽くしたかのようにくずおれそうになったが、途端にふわっと浮きあがって床から足が離れた。

その光景を目にした途端、茫然自失としていた少年がハツと我に返る。

「おい、おいっ、先生、止めろッ!」

「無駄よ。あんたが一番知ってるでしょ、ろえくん?」

りのいは気を失ったように目を閉じたまま、空へ向かって徐々に高度を上げていく。それにつれ、りのいの全身が灰白く発光し始めた。光は徐々に強さを増し、それに伴ってりのいの背後に巨大な紋様が見え始める。

「あそこまで行ったら、もう何をしても無駄。この世界はリセットされる。適当なところからやり直し」

シロガネ女史の言ったとおりである。りのいは《時空崩壊の大魔法》をその体に秘めた特別な存在だ。ひとたび発動すれば《過去から現在》という時空ごと、この世界を葬り去る。世界の歴史は崩壊に巻き込まれなかった一番新しい時間から紡ぎ直されるのである。そして魔法の発動はりのいが正常な精神を保ち続けることで抑止されている。逆に、りのいが例えば突然の接吻によって恥ずかしくて死にそうなくらいにまで心の平静を失えば、魔法は無造作に発動してしまうのである。

要するに、大変遺憾ながらこの世界はもう滅ぶ。

「次は一万年くらいで済むといーわねー」

清々しい表情でシロガネは頭上の大魔法を見あげる。

上昇したりのいの高度はあの異界の神に並んでいた。異

界の神は再び仮面の口からあの衝撃波を繰り出さんとしている。その前に、りのいの背中の魔法陣が光り輝き、周囲をぐるりと囲むように十二本の片刃の剣が空間から降って湧いた。最初並行に並んでいたそれらは、おもむろに切っ先を円の外側へ向ける。大魔法は発動の準備を整えた。

「ああ！ くそっ、ふざけるな！ りのいはこの世界を愛しているんだぞ！ その彼女に世界を壊させるといふことがどれほどざんこ——」

「はい、聞こえませんかよー？ 世界メツボーしまーす。やばーい、みんな逃げてえー」

酩酊したようにくねくねし続けるシロガネの前で、少年はついに膝をついてうなだれる。彼の名はろえ。いつもりのいのそばにいることもあって、彼についてもいろいろあるのだが、もはや面倒なので割愛する。

こうして、世界は滅亡した。

続・遺憾ながらこの世界はよく滅ぶ

七津八

※作者急病のため、本作は非常にへついでいきづらい内容を含みます。

\* 二時限目 \*

我輩はアブソリュート学園。校舎である。

比較的生徒主体で自由度の高い校風で知られる我が校だが、生徒の自己管理については何かと厳しい。卑近なものでは出欠席や遅刻の頻度などが評価の指標として大きく扱われる。にもかかわらず、授業の真つ最中であるこの時間に部室の明かりをつけている理科部はいったい何たることか。

「……完成せんで」

ドクター少年はスランプだった。

床に座り込んだ彼はスタンド式体重計に似た計器にぐるりと取り囲まれている。足元に据えてあるのは丸い盆のよな器だ。器の中には電子系の部品がぎっしりと詰まり、

赤青のコードが方々へ伸びて、周りの計器だけでなく部室にある種々雑多な用途不明の機械たちと結びついていた。ファンや冷却ポンプのぶろうんという稼働音だけに満ちたこの部屋はいかにも寂々としている。その中で黙々と手を動かしていた少年のぼやきは、まるで部室全体を諫めるかのごとく鎮痛に響いた。

「ぬあああんであああ~~~~~~~~っ！」

左手の六角レンチを取り落としながら少年は頭を抱えた。クラスメイトからはドクターの愛称で知られる彼の悲願は、いつかプロのマッドサイエンティストになって地球破壊弾を完成させることにある。今彼の足元にあるのはその試作三十五号機。だがその製作はどうかやら行き詰まっているらしかった。

「あれ？ 完成、ドクケン？」

懊悩するドクターの背中に、部室で唯一のくつろぎスペースであるソファの上から進捗をうかがう声がかかる。今までそこですつと本を読んでいたクラスメイトのヒカル少年は、ドクターが何とぼやいたかも聞き取れていなかった。当然その呑気な言い草はドクターの癪かに障る。

「したとも。ああ、完成しましたよ！ 見てるよ？」



言うが早い。ドクターは器の中に繋がっていたコードをほとんどむしるようにして外していく。かたわらに投げ捨ててあつた蓋をぴったりはめ込むと、器は完全に円盤状になった。ドクターが手を離すと外装に青いLEDがともり、内臓モーターが自動で動作確認を始める。不思議な駆動音と共に二十センチほど地面から浮きあがると、イルミネーションのパターンが変わってAIが音声を出した。

「オハヨウゴザイマス」

「おお！ やったね」

新作円盤型ロボットの進水式は無事成功。そう思ってヒカル少年は無邪気な賛辞を送る。

「それでドクくん、このロボットくんは何ができるんだい？」

「見てりやわかる」

ドクターはとかく忌々しそうだつた。今すぐ分解してしまいたくてたまらないというのが顔に出ている。だがロボットを停止させようとはしなかった。

「ハタラクィマス」

次にそう告げたロボットは着地するかしらないかという高さまでするすると下降し、そのまま床に沿って部室の中を

行ったり来たりし始めた。何をすることもなく行ったり来たり。何かを探しているようでもない。

「あれは何をしているの？」

「ゴミを吸い込んでいる」

「ゴミ？」

「そうだよ……つまり、」

「オヘヤガ、キレイニナリマシタ」

LEDの色が緑に変わってロボットがそう告げた。足元へ戻ってくるロボットから目を逸らしてドクターはわずかな震えている。対照的にヒカル少年はきらきらと目を輝かせ、ボールを拾ってきた愛犬へそうするように両手を広げてロボットを迎え入れた。

「えらい！ 自動でお掃除してくれるロボットなんだ。

お利口さんでかわいいね！」

「エヘン」

「ル〇バみたいだね。名前はあるの？」

「アイショウハ、ブリュンヒルデ、デス」

「へえー。じゃあブリリンだねっ」

「『ブリリン』、デ、アイショウヲ、トウロクシマス」

「わはっ、すごい！」

「エヘン」

「そう、よくできている。だがまさにル〇バだ」

ドクターは打ちひしがれていた。

本来であれば自ら計算して自走し自爆する最強の浮遊地雷が出来あがるはずであった。だというのに、完成してみれば低空飛行する吸引装置である。図面の上では手違いなどなかった。どうしてこうなったのか、やはりスランプなのかと、ドクターは孤島に取り残されたような気分であつた。スランプどころか以前に成功と呼べる成功を得たことなどなかったが、それでも身と青春を削り続けている三十五作目である。すでに三十四回、正常に動作するものを作り出してもきた。いいや、三十五作品目もやはり正常に動作はしているのだ。先に生まれた三十四の兄弟たちと同じように。

「なぜだ、なぜ……何がどうなつたら！ 毎回毎回家庭用電化製品ばかり組みあがる事態に陥るっていうんだ！」

ドクター少年の悲嘆は部屋から溢れ出しかかつていた。三台ある冷蔵庫はどれも彼が作った爆弾だったし、プリンターも炊飯器も空気清浄器もコーヒーマーカーも爆弾だった。爆弾として生み出そうとしたにもかかわらず、ドクタ

ーの手がけた作品はどれもこれも、その本来の機能を果たさず予定外の活躍ばかりをしていた。そもそも当初の図面通りに完成されていれば生じ得なかったはずの機能ばかり副産物として生じるのである。ビーフシチューを作ろうとしてカレーになるよりタチが悪い。概ね奇跡的な失敗しかしてないとも言えた。

「ぼくは素敵だと思うけどな。電気屋さんに雇ってもらえるよ」

「全然うれしくない。クソッ。お前の座ってるそのマツサージチェアだつて爆弾なのに！」

ボルドーカラーの一人用ソファにしか見えないそれもドクターの作品である。試作二十七号。当然のごとく爆発はしない。脇にリモコンがぶらさがっているがスイッチを入れてもマツサージ機にしかならない。座ると幸せになれる。

「俺は世界を滅ぼしたいんだよ！」

「またまたー。そんなの二年の有馬さんあるばにでも任せとけばいいのに」

有馬というのは「うーん、殲滅したーい」が口癖の女子生徒だ。二年Φ組の一員である。《くろまんじゅう》と呼ばれる謎の生命体を周囲の二酸化炭素から常時無意識に生産

しており、変幻自在でダイヤモンドの硬度を持つくろまんじゅうは暴れ出すと手がつけれられない。三百匹もいればこの地域住民の殲滅は充分可能だろうと思われる。千匹を越えた時点で手中に収められるのは、国、大陸、そして世界全土である。

ただし、

「あの女に任せていたら、人類史は衰退から消滅まで平穩この上ないままだぞ？」

ドクターの言うことももつともだった。有馬のくろまんじゅうはある程度数が増えると喧嘩を始めてしまう。喧嘩というよりは共食いである。そのせいでクラス一つきれいに殲滅するにすら至っていない。くろまんじゅう同士の攻防があまりに激しすぎるため、その周囲約二十メートル圏内は人も物も粉微塵にされるが。

「気長に待てばいいじゃない。平和が一番だよ」

「だからっ、その平和が一番嫌いなんだっての！ 平和イズ・ワースト！ わかる!? しかも俺の手で壊したいの！ 自分のこの手で！ 発・明・品・で！」

「生活を豊かにしてくれるキミの発明がぼくは好きだなあ」

「ぐあ~~~~~!!」

ドクターは煩悶したが、ヒカル少年は彼の作ったものも有用性以外の面からも称賛していた。

例えば、一番新しい三十五号機は、浮遊する掃除機だ。浮遊するということはつまり、真下へ向けて押し出す力で常に重力に反発してはならない。だが掃除機としての機構が生み出しているのは、真下にある物体を下から上へ引き寄せる力だ。下へ向ける力と上を向く力が干渉し合うことなく作用している。ドクターが爆弾の副産物として生み出した電化製品は、どれも地味ながらこうした未知の機構を発現しているものばかりだった。

「クソッ、クソッ！ できないと思ってんだな？ 絶対お前を最初に爆発させてやる！」

「いや、その役はこちらに譲ってもらいたいな」

あらぬ方向から声が出たかと思えば、いつの間にか出入り口のドアが開いていた。間口から差し込む逆光を背に浴びながら、二つの金色の目が意味深に光る。にこにこ人好きのしそうな顔の男子生徒が、壁に背中を預けるようにして立っていた。

「ヒーローは、爆発寸前の危険な爆弾を抱えて一人、蒼穹を翔けあがり、星の海で華やかに散るものさ。もちろん、

キミとの一騎打ちに勝ってからね、マッドドクター」

自称ヒーローでヒーロー志望の少年は、大仰に横暴で横柄な仕草でドクターに手を差し伸べる。

一年Ω組のトパーズ。第一学年に二クラスしかないうち、ドクターやヒカル少年らと別クラスの生徒だが、いつか世界の敵にまわると吹聴しているドクターを勝手に好敵手に定めて付きまとうのを趣味にしていた。

「ふむ。なるほど、それはそれで魅力的だ」

ドクターも相手がトパーズとわかれば唐突な登場に驚きもしなかった。さすがに長く付きまとわれたせいで慣れている。というよりも、いつか世界を救うと豪語する輩に好敵手扱いされて、未来のマッドサイエンティストはまんざらでもないらしい。

「ただ、俺の負けが決まっているかのような言い草は納得がいかん」

「ふふ、ドクター、悪は栄えず、正義は必ず勝つものさ。ただし、悪は死なずに生き残り、正義はいつか死に至る。この世はとも残酷だ。どうだい、素敵だろう？」

「はいはい、どうも素敵ですねー」

ドクターはトパーズのこの、筋書きとか構図とかへのこ

だわりにだけはウンザリしていた。ドクターでなくてもだれでもウンザリさせられるだろうが、ドクターは特に型にはまった考え方が嫌いだった。ちなみにヒカル少年の方は「言われてみればそうだねえ」などと呑気に同意していたが、彼の場合は心底そう思っていた。

「そんなことより、正義の味方が授業抜け出してきているのかよ？ 内申さがるぞ」

「ふふ、正義とは、学業の成績や試験の点数で推し量れるようなものではないから問題ないのさ。それに、強大な悪が産み落とされようとしている今このときにおいて、日常のすべてはヒーローにとつて些末なことばかりだ。キミもぐずぐずするなよ、マッドドクター。僕が挑むべき殺戮兵器は、いったいどこにあるんだい？」

「お前なあ、ヒーローが敵の本拠地にいきなり攻め込んでくるなよ。好きだろ、そういう段階踏むの」

「善は急げとも言うよ？」

「ヒカル、お前は黙ってる」

「これは前哨戦さ。僕は一度キミに大敗して、死んだかに見えたが奇跡的に復活し、さらなる力と仲間を手に入れて帰ってくるんだ。そのときは今日のようにはいかない。僕

が再びキミの前に現れるときは、キミが栄光といっしよに塵となるときさ」

「やっぱ俺死ぬんじやねえか」

「殺されたくなかったら早く爆弾を出したまえ。表のオルキエラたちがぐずり始める」

「表のって……まさか!?」

ドクターはヒカルと自称ヒーローを押しつけて外廊下の手すりから身を乗り出した。部屋には校舎二階の空き教室を利用している。下は学習室で、それが面している外は体育館前の中庭だ。その比較的狭い面積に、三角錐型の巨大な黒い化け物がうじゃうじゃと密集していた。

「トパーズ、お前、出しすぎだよ!」

「うん? キミの悪の発明品にならこれくらい一掃されると思ってたんだが」

「買い被ってくれてどうもありがとうよ! だがな、残念ながら試作三十五号機は掃除機だ」

「お誂え向きじゃないか。小手調べに下の彼らを掃除してみせてほしいな」

「だからっ、お前の相手ができるようなもんじやねえの! ただの掃除機! わかる!?!」

「これはお見それした。僕など相手にならないときたか」「ちげーよ! お前も人の話聞けよ! だああつ、もう、ヒカル! ル〇バ持ってこいル〇バ!」

「ブリリンでしよー?」

「あーそれそれ! はいはい、ブリブリね、それね!」

「その前に、ちよっといいかな、ドクン?」

「いいから持ってこいって! ブーリンだのブリリリだの、わかんなかったら全部持ってこい、全部! さっさと!」

「いやー、先に助けてほしいかなあ」

「何? 手助け? そんな重いもんじやねえだろブルリン——って、お前、なんだそれ?」

ドクターが部屋に引き返してみると、ヒカルのそばに得体の知れないものが立っていた。パッと見た瞬間、ドクターはそのシルエットをチェスの駒のポーンのように思った。ただし、ポーンとしての足の部分はピンク色の糸こんにやくのようなものでびっしり覆われている。頂の丸い部分は肌色の表面がてらと濡れ光っており、中央に歪な三つの穴がボウリングの球のような位置取りで空いていた。目があるようには見えず、水平に並んだ二つの穴は鼻孔、下の少し大きな穴は口腔らしく思える。

「お前、もしかして、それ……」

ドクターが唾然としながら尋ねると、ヒカル少年はえへ、と曖昧に笑ってみせた。等身大の糸こんにやくは、彼の右腕へすでに絡みついている。

ドクターは面倒くさそうにため息をついた。

「また異界の使者か……」

「どうもそうらしいね」

ヒカルはごく普通の平凡な少年である。しかし、それはこの世界だけのことで、他の世界においては必ず救世主になれる才能を持っている。当然、未来予知と次元航行の手段を有する滅亡寸前の異世界からは引つ張りだこで、こうして度々、何の前触れもなく死者が訪れては彼を異界に召還しようとするのである。

「話の腰を折ってごめんね、ドクン。またちよつと世界を一つ救ってくるよ」

「はいはい、いってらっさい。今度のは友好的そうできつたな。話ができそうにはないが」

「そうだね。お話はできないみたい。またお土産話聞いてね、ドクン」

「世界を救うくだりはいらんど。どんなふう滅亡しそう

だったかだけ教えろ」

「うん。それじゃあね」

「待ちたまえ」

ヒカルが手を振ろうとしたとき、それまで静観していたトパーズが歩み寄ってきた。平静を装っているがやや興奮気味だ。糸こんにやくの異界人の前で、胸に手を当てて一例する。

「どうも、終末世界の大使くん。言葉がわかるかな？ 僕の名はトパーズ。キミが捕まえている彼以上にヒーローになる資格を持つ者さ。どうだい？ 彼なんか置いてけとは言わない。だが、僕もセットでお迎えするというのは……」

トパーズが調子のいい弁舌を振るっていたのはそのままだった。急に彼の体が大きく震えたかと思えば、そのまま傾いて床に倒れた。彼を中心にして白い床に赤い水たまりが広がっていく。彼の胸には大きな穴が開き、そして彼が立っていた場所には血に濡れた糸こんにやくの一端が真っ直ぐ突き出されていた。

「……あちゃー」

ヒカル少年が困り顔でつぶやく。

ドクターも鳥肌を立てて顔をしかめた。

「おいおい、ホントに友好的か、そいつ」

「言葉がしゃべれない分、不安なのかな。不用意に近づくと危ないよ、ドクン」

「遅えよ。俺は近づかぬえけど。そっちの世界救った後、元気になってこっち攻めてくるなんてことないよな？」

「どうだろうね。少なくとも今は、こちらから何かしないうちは何もしてこないと思うよ」

「じゃあもうお前がさつさと連れていかれた方がいいな。行け行け、ほれ。シロガネには俺が言っとく」

「ドクン、ダメだよ、先生を呼び捨てにしちゃあ」

「いいから、はよ行けっ」

「わかった。じゃあ、行ってくるね」

頷き、ヒカルは異界人を促そうとする。一人の生徒が犠牲となったが、どうにか我が校は危機を免れた。

……かに、見えた。

「てめえら、なあにやってんだ？」

ドクター少年は一瞬何が起こったのかわからなかった。

ヒカル少年も、服が汚れていくにもかかわらずその場に

固まって瞬きだけしていた。

突如、糸こんにやくの上のポウリングの球だけが飛びあがったのだ。

床に残された本体は、頭部との接合部からトマトジュースのような液体を盛大に噴きあげ始めていた。その液体は色も匂いも人間の血液に酷似していて、それが他の何よりも事態の現実味を失わせているようだった。

「なあなあ、てめえら、オレに隠れていったい何してやがったんだ？ ……おろ？ ペリドットの野郎がぐうすかびい。おうーい」

トパーズの遺体のそばに誰かがしゃがみ込む。血で染めたような濃い赤毛の頭。スカートの下から生える筋肉質の両脚。ごつごつした両手がもたれかかるようにして床に突き立てているのは、刃と柄が平行に並ぶ長大な片刃の槍だ。赤黒い肉がその切っ先にこびりつき、鋼の輝きを劣化させている。

「おうーい。あーダメだ、完全にこと切れてら。やれやれ」  
その女子生徒は呆れたように首を振ってすつくと立ちあがった。

そこでようやくやく我に返ったドクターが大慌てで彼女に

詰め寄った。

「おいおいおいおい、お前、何してくれてるわけ!？」

「はあ？ 何って……何が？」

「斬ったろうが！ そのの！ そいつ！ 今！」

赤髪の女子生徒はこともなげにヒカルと異界人の方を振り返る。それから不思議そうな顔をドクターに戻した。

「おお、斬ったな……え？ 斬るだろ、普通？」

「斬らねえよ！ なんでだよ！ お前、あいつが何だったかわかってんの!？」

「異界の使者かなんかだろ」

「わかってんじやねえか！ 何!？ なんなのお前!？」

「だあー、うっせ。うっせえなあ。ぎやーぎやー喚くんじやねえよ。斬んぞ、コラア」

「大変だ、ドクケン」

女子生徒を遮ってヒカルが声をあげた。見ると、ヒカルは糸こんにやくの内部をまさぐって何か機械のようなものを取り出していた。

「これ、たぶん生命維持装置だけど、アンテナついでる。生命反応もモニタリングされてたはずだよ。つまり……」

「それがどうしたよ？」

本当に察しが悪いのかわざとなのか、女子生徒はあっけらかんとむしろ鼻で笑うように言った。その胸倉をドクターが掴む。

「使者を殺したことが向こうの世界にバレたってことだ。わかるか、この脳筋女？ 報復と称して異世界が攻めてくる。戦争が始まんだよ！」

少女はそれを聞いて、驚くどころか笑った。右目を開き、左目を細めて邪悪な嘲笑を浮かべた。胸ぐらを掴むドクターの両手を片手で叩き落とし、ついでに突き飛ばしてから微笑みかける。

「そりや、てめえ、してえだろ、戦争？」

戦神フリアエ。彼女は全学年からそう呼ばれていた。戦鬨の封理亜鉛（ふうりあえん）。ドクターは忘れかけていた。友好的外交は彼女によって汚いを食わされる。彼女にとって、ヒカルを求めて異世界から渡り来る使者は皆、未知の戦闘手段を持つ異世界という名の巨大な軍隊を引きずり出せるイモの茎なのだ。

「ああ！ もう来てる！」

窓から外の様子を見ていたヒカルがまた声をあげた。歪なクッキーにも見える巨大で扁平な土の塊が空を覆ってい





たちは思わず顔を引つ込める。漆谷はさらに怒号をあげた。  
「誰だあああ、ペットを学校へ持ち込んだやつはあああ  
あ！俺の襲名願書おおお、あれじゃもう出せねえだろう  
がアアアアア!!」

「書き損じたのかな？」

「詳細はどうあれしめた！ おおーい、せんばーい！」

ドクターは身を乗り出して階下に向かって呼びかけた。  
振り返った漆谷の形相は魔界の王たる資格を十二分に発露  
していると言っても過言ではなかったため、そのプレッシ  
ヤーにドクターは呼吸困難に陥りかけたが、自身の夢と世  
界のためと奮い立ち、上「空のクッキー船団を指差して大  
声で訴えかけた。

「あいつらです！ あいつらが世界を乗っ取ろうとして変  
なモンスター落としてきました！」

「ぬああああにいいいいいい!!」

上空を見あげた漆谷の髪が黒い炎のように逆立ち始める。  
異様に発達した犬歯を剥いて目を見開いた途端、その背中  
から漆黒の翼が生え、地面に巨大な魔法陣が出現した。

「そんなに欲しくば、くれてやろう。もろとも消え去れ！」

「へへ。」

ドクターは耳を疑ったがもう遅かった。

漆谷の右腕が紫色に光り輝き、その手が空へ向くと太い  
レーザー光が射出された。レーザーは異界の船団の合間を  
すり抜けて空へ消え、消えたかと思いきや、船団よりさら  
に高層の空に無数の巨大な魔法陣が出現した。またたく間  
に紫光の紋様と魔界の文字が天空を埋め尽くし、さらに蒼  
天はどこからともなく湧いてきた漆黒の雲霞うんかに覆われた。

「わあー、すごい大魔法。さすが魔界の王子様だね」

「のんびり眺めてる場合じゃない。世界が滅ぶぞ！ やば  
い、みんな逃げろ！」

空が歪む。暗雲が渦を巻く。無数の魔法陣は一斉に光を  
放ち、大地を穿うがつ強烈な炎の槍を撃ち出した。異界の船団  
は灰燼かいじんに帰し、地上のことごとくも灰燼に帰し、我が校も  
一瞬で灰燼に帰す。

こうして、世界は滅亡した。

二時限目ー了

遺憾ながらこの世界はよく滅ぶー完

月刊缶じうす5月号 通巻188号  
2013年 4月23日発行  
編集人 64 黒歴史  
発行所 広島大学文団BOX